サンティアゴ巡礼調査に参加して

－その仕組みを考える－

内　田　九州男

は　じ　め　に

先ほど山川先生から行程の説明がありましたように、私たちは車で全行程を走り抜けてきて、実際の巡礼路を歩いたわけではございません。従って色んな見落としもあるでしょうし、歩きの実体験に基づいたお話はあまりできません。そういう留保をつけながら今から報告させていただきたいと思います。

私たちの体験の少なさをカバーするために、鎌田一志著『スペイン悠久の大地　サンティアゴ巡礼の道を歩く』（2006年）、黛まどか著『星の旅人　スペイン「奥の細道」』（光文社、2000年）、土田芳樹「還暦カミーノースペイン巡礼記」（日本経済新聞、2007年7月～11月）、この二著書と記事を利用させてもらいました。そしてスペインのガソリンスタンドで入手したガイドブック『PILGRIM'S　GUIDE』。向こうのガソリンスタンドというのは食堂も兼ねていて、またいろんなものが売ってあるんです。このスタンドの書籍コーナーで菅谷先生と山川先生が見つけてこられたのが、この本です。スペイン語版と英語版がそれぞれ一冊手に入りました。従いましてこの四つの文献と私たちの体験を組み合わせながらお話をさせてもらいます。

1　壮大な仕組み

このサンチャゴ巡礼はものすごく大きな仕組み－あるいは仕掛け－がつくってあるなあという風に感じました。

図１

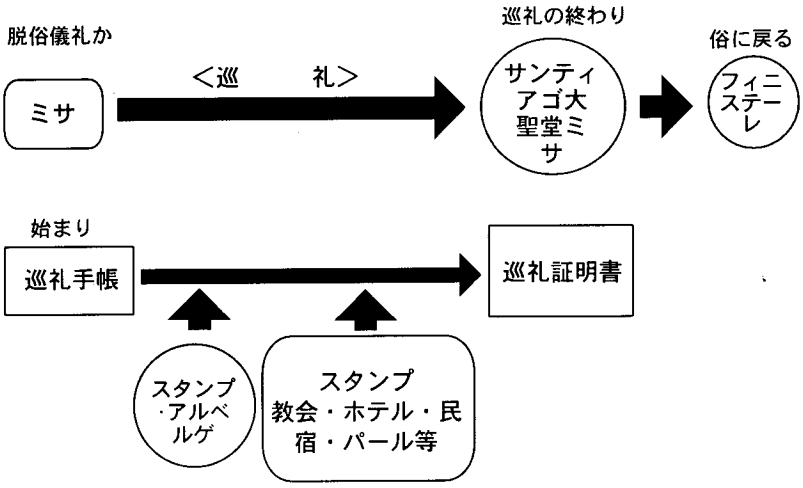


図１をみてください。巡礼者はまず巡礼に出る時スタートする地域の教会に行きましてミサに参加します。これは脱俗儀礼と考えられます。俗人から聖なる道を歩む人間へということでしょうか。ミサは、神にその祝福を与えていただくとか神の加護をお願いするという風に言われております。そして巡礼の終わりはサンティアゴの大聖堂でまたミサに参加することです。これで巡礼は終わりになるのです。巡礼者は次にフィニステーレにまで行きまして、そこで先ほどもお話がありましたように、巡礼中に持っていた品物を焼いたり海に捨てたりして、いったん巡礼とは縁を切るというような儀式を行います。これが、巡礼から俗世間に戻っていくというような儀礼と考えられています。

次に図１の中の下の流れです。巡礼者は巡礼手帳を手に入れて、それを持って例えばアルベルゲという巡礼宿に泊まり、そこで必ずスタンプを押してもらう。また途中で教会やバール（居酒屋兼食堂みたいなところ）などに寄ったらまたそこでスタンプを押す。それから私たちが行ったような史跡に該当するようなところへ行くと、またスタンプを押すというような形で、巡礼手帳にずっとスタンプを加えていく訳です。最後にサンティアゴ・デ・コンポステーラの町の中にある巡礼事務所に行きまして、この手帳を示して巡礼証明書を発行してもらうという、こういう仕組みになっているわけです。「壮大な仕組み」というのは、実はこの旅程がフランスからスペインの東から西へ、横断して全域に及んでいるという、ものすごい大きなスケールでやられているからです。

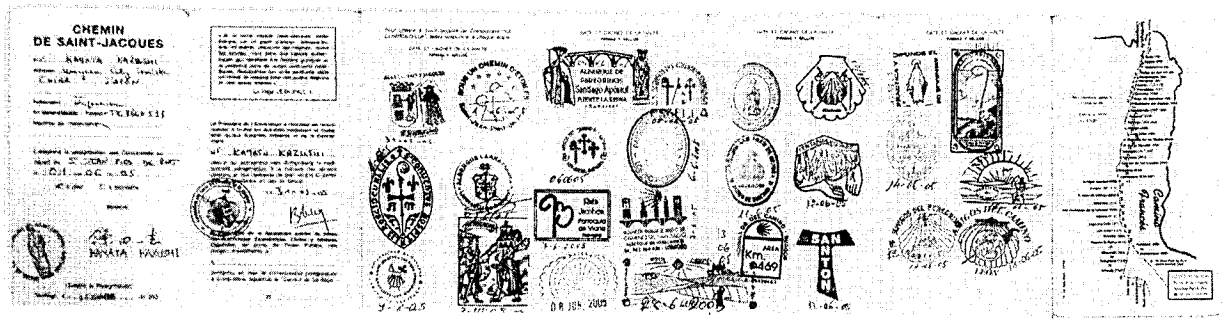
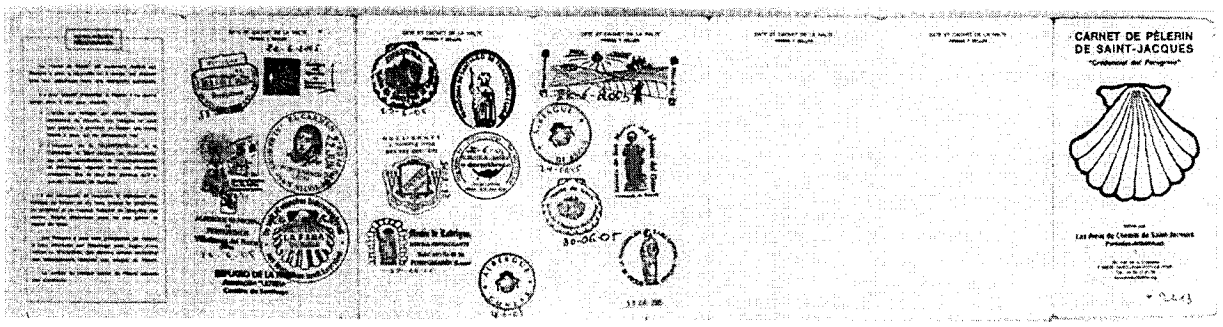


図２↑・３↓　鎌田一志氏の巡礼手帳



私たちはさっきも言いましたように歩きをやっておりませんから、この手帳が手に入らなかったわけです。途中で少し探したんですが、やっぱり手に入しませんでした。それで先ほど著書を紹介しました鎌田一士さんが、実際に自分で歩かれた時の手帳をお持ちでしたのでお願いして使わせてもらうことにいたしました。

巡礼手帳は折りたたみ式で、表紙（ホタテ貝のイラストがある）の裏の３折り目から６折れ目までスタンプを押していって（最後の７折れ目は地図）、それを裏返してまた２折れ目からスタンプを押していくという形です。

この巡礼手帳が巡礼者であることの保証をしていくものになっているわけです。で、なぜこんなものが出てきたのか。『PILGRIM'S GUIDE』では、中世の領主たちとか、宗教的権威のある人たちが巡礼者に保護と免税特権（通行料、入場料の免除など）を与えたのが、現在の巡礼手帳の元になっていると書いています。中世では巡礼者は歓迎されたとされています。彼らは往復の旅費・生活費も持って来なくてはならなかったから、もともと相当裕福な人たちが巡礼に来たのです。勿論全員がそう人ばかりではなかったと思われます。またこうした特権をあたえた書類がどうこの巡礼手帳へと繋がっていったか、その具体的な展開はこの『PILGRIM'S GUIDE』ではわかりません。

現在の手帳は、外国人の場合はパスポート番号を入れることになっておりますから、非常にきちんとした書類でもあるわけです。

スタンプの脇には日付を入れてもらい、巡礼したという手がかりにしているようであります。図４はその一例で、「14-06-05」とあるのは、「2005年6月14日」の意味のようです。

図4 スタンプの例(鎌田氏手帳)

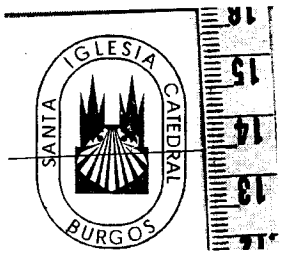


図5 ブルゴス大聖堂のスタンプ

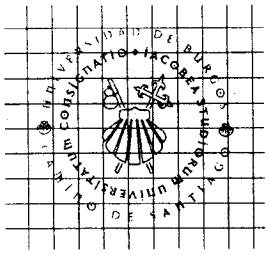


図6 ブルゴス大学のスタンプ

図7 サンタ・マリア教会のスタンプ

今回私たちは途中でスタンプがあることに気づきました。ブルゴスの大聖堂で、カウンターの上にスタンプ台とスタンプ一個が置いてあったんです。私が買った本に押してみたら、これはどうも巡礼手帳に押すスタンプらしいなということがわかりました。それで、次のブルゴス大学でも事務所で、「スタンプありますか」と尋ねたらスタンプを示して、私の持っていたメモ帳に押してくれました。次にレオン大聖堂の博物館入り口の書籍販売所で、また押してもらいました。巡礼道の一番の難所と呼ばれるセブレイロ峠のサンタ・マリア教会では、受付の女性がそこにあるスタンプを全部押してくれたんです。(なお鎌田さんの手帳では、1日に1～2個のスタンプを押していったようです。)鎌田さんの巡礼手帳は、フランス語で書かれておりますので、巡礼をフランスから始められた時に、そこでこの手帳を入手されたのだと思います。巡礼道はフランスとスペインに跨って組織されています。このルートは5つの自治州と166の町や村を通るという非常に壮大な規模であると同時に、関わる組織も非常に大きいものであると考えられます。

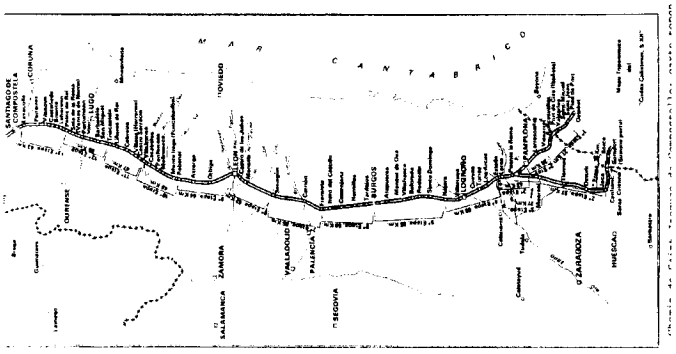


図8 世界遺産登録時の地図(World Heritage List The Route of Santiago de Compostelaより)

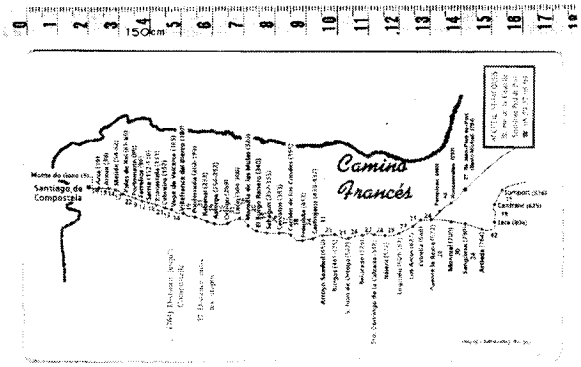


図9 巡礼手帳の地図

世界遺産登録の際の地図と巡礼手帳の地図がほぼ同じものであります(図8･9)ので、どうも世界遺産登録の時に、その前後にこの仕掛けをまとめる仕組みが作られたのでは?と考えております。1933年に世界遺産になるというのが山川先生のレジュメにありましたが、その一年前の92年にスペイン政府の関係部署、自治州5州の代表者などによって、組織(協議会)を作っております。これがこの巡礼全体を管理する、どうもトップの組織みたいですので、この手帳を活用しての巡礼の仕組みはここから始まっているのではと推測しています。

次に、『PILGRIM'S GUIDE』には、巡礼者の規定があります。また巡礼証明書を出す規定も出てまいります。最初に誰を巡礼者とみなすのかですが、まずは宗教的な目的で歩く人。もう一つは最近の形だと書いてありますが、非宗教的目的で歩く人。四国遍路でも、自分探しだとか色んな言い方をしますが、自分の現世や来世の問題を託して歩くのとは違う場合です。ガイドブックではこの両方の目的を認めるとなっております。従って歩く人の幅が非常に広くなっていることは確かです。

次は巡礼証明書の発行。この証明書は「コンポステーラ」というと菅谷先生が紹介してくださっていま

す。巡礼の最後に巡礼証明書がもらえる人は、徒歩の場合は最後の100キロ、サンティアゴ・デ・コンポステーラという終点に着くまでの100キロ、これを越える距離を歩いた人、次に自転車の場合はその倍で200キロ以上を走った人、こういう風になっております。さらに馬を使って行く人もいるみたいですけど、それ人については『PILGRIM'S GUIDE』には書かれておりませんでした。

三つ目のルール。これも『PILGRIM'S GUIDE』には書かれておりませんが、土田さんの日経連載記事の一番最後に紹介してあります。帰りは行きのルートの便宜を利用できないということです。特にアルベルゲ・宿泊所が利用できない、ということです。この巡礼手帳による巡礼行は、いわば片道切符だということです。

（参考に、土田さんの記事によれば、2005年の巡礼者総数は９万４千人。この数字はかなり正確だろうと思っております。）

図10 巡礼証明書
（『PILGRIM'S GUIDE』）

2　道と道標

私たちは巡礼道そのものを歩いておりませんので、私たちが撮った巡礼道の写真は少ないのです。そのため、『PILGRIM'S GUIDE』から、土の道の写真を紹介します。土田さんによるとこういう地道は、全体大体800キロ（ピレネーを超えてからスペイン内での歩く距離）の9割以上が土や草の道で専用道になっているとのことです。『PILGRIM'S GUIDE』の写真を見ると昔ながらの道がずっと生きているという風なことがわかります。

図11（上左図）　道標と巡礼道
図12（上右図）　畑の中の巡礼道
図13（左図）　同上
（『PILGRIM'S GUIDE』）

私たちは車窓から巡礼道の一部を写真におさめました。自動車道に沿って白い道がずっとあります。自動車道とは別に地道が用意してある。あんまり幅は広くはありません。そして特徴は2つの白い石柱が道の両脇に立てられていることです。これがいわば巡礼道を示す道標です。それには貝が彫ってあるはずなんですが、私たちの撮った写真では小さくて確かめることができません。

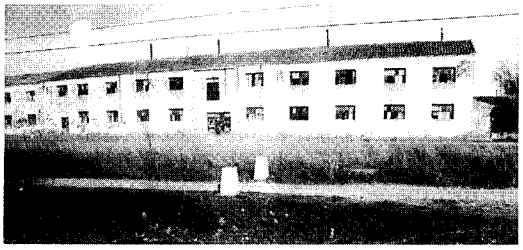


図14・15車窓からの巡礼道

もう一つ紹介する道はサンティアゴへあと72キロの地点を示す石柱を見つけた道です。この道は農村地帯にある道で、日常的には車道としても利用されている道です。その車道のの脇に細い道が作ってあります。道の脇の標識を見てみると、巡礼道と車道をきちんと区別して表示している。その道を実際に歩いている二人連れの巡礼者がおりました。この時期はクリスマスが近く寒い時期で、巡礼者の数はほんとうに少なかった。たまたまこの道の手前で二人を見つけましたが、写真を撮ることはできませんでした。

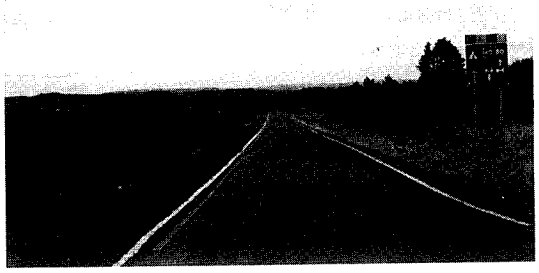


図16　車道と巡礼道

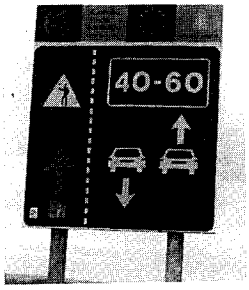


図17　図16の道標

今の72キロの根拠は、近くに帆立貝のマークが彫り込んである石柱がありました。ちょうど四国遍路の石の道しるべ、手形を彫ったものがありますが、あれに良く似たものでした。それに「K.72」と書いてありました。それがあと72キロですよ、という表示でしょう。ところがその石柱の後ろには看板がついておりまして、そこには古いものはこんな形をしていたんですよという写真を展示しているようです。

図18石の道標

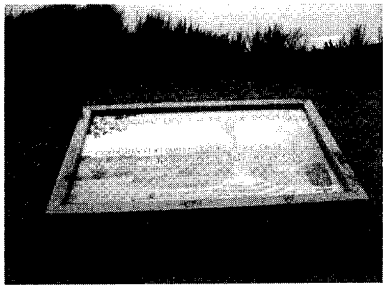
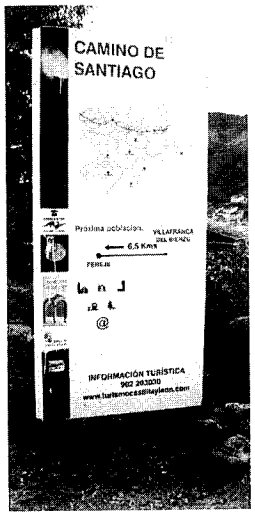
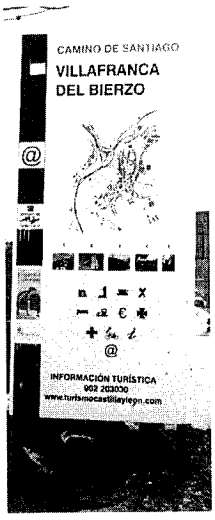


図19後ろにある看板

図20斜めに写す

次に道端に色んな表示がありましたので紹介します。大変大きな交差路には「Camino de Santiago」という看板がありました(図21)。Caminoというのは巡礼道のことで、青地に黄色で帆立貝のマークを描いたで大きな看板が作ってありました。許しの門という門を持っている教会の傍には州規模の地図に巡礼道が記されている立看板と共に、もう少し地域を限定した地図を入れた看板(図22･23）がありました。いずれも「Camino de Santiago」と書いてありましたので、巡礼道を示す地図であることがわかります。それから市街地では、瓢箪の水筒をぶら下げた杖を持って歩く巡礼者のイラストと方向を示す白い矢印が書かれた看板（図24･25）、これと組み合わせている、帆立貝のマークがついているもの（足元）を見つけました(図25)。





左から図21、図22、図23
下図24

図25

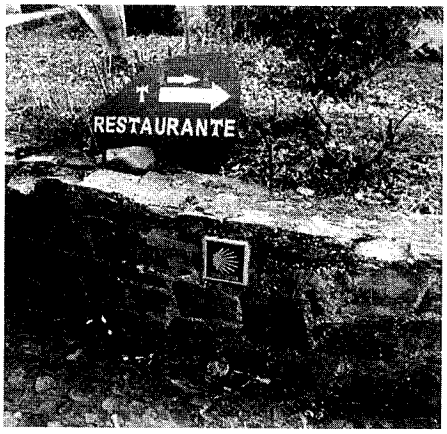


図26

図27→

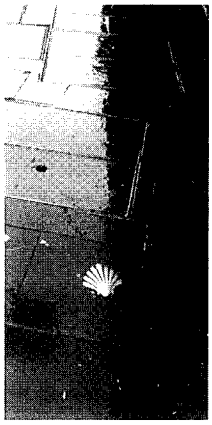
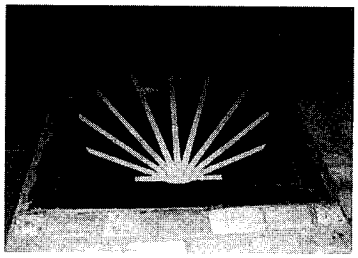


図28↓



さらにレストランも、巡礼者用のメニューのあるレストランを黄色い矢印と帆立貝のマークで示していました。このような形で石やら石の壁を利用してマークが入れてありました（図26）。レオン大聖堂に行く道の途中には足もとに帆立貝が埋め込んであって、よく人が踏むのかぴかぴかに光っていました（図27）が、そういう形で巡礼道を示していました。またログローニョのアルベルゲのすぐ近くには大きな帆立貝のマークが道路に埋め込んでありました（図28）。

■歩きを励ます仕掛け■

それから歩きを励ます仕掛けがありました。一番はっきりしているのは100キロを表示しているもの。あと100キロでサンティアゴですよ、というのがあるんですね。私たちはそこに行っておりませんので、黛さんの本からその石柱の写真を引用させていただきました。それから先ほど触れました許しの門。「ここまでくれば、サンティアゴにたどりつけなくても神は許してくれる」という言い伝えがあるという門（土田）。くたびれ果てた人を慰めてくれる門らしいんですが、そういう仕掛けがつくってあります。しかもこの教会がある町はフランス人の巡礼者たちが定住して開拓した町だということです。巡礼者に期待された役割の一つがここに出ているのかもしれません。

図29あと100ｋｍの道標
（黛著書より）

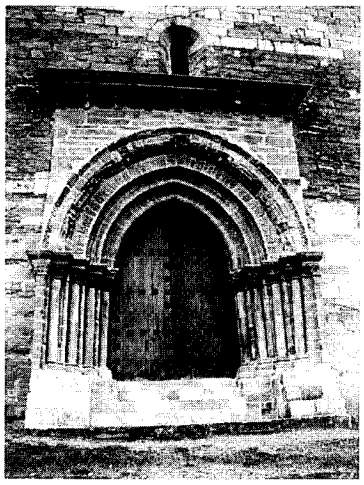


図30許しの門

3　アルベルゲ（ホステル、巡礼宿）

次に今度は宿の問題です。これはアルベルゲと呼び、ホステル、巡礼宿と訳します。アルベルゲは土田さんによれば、自治体が経営するもの、教会が経営するもの、民間が経営するもの、の三種類があるということです。この中で自治体が経営　するものは原則として無料。朝旅立つ時に心付け程度お礼に置いて出発すればいいと書いてあります。巡礼道全体で大体200ヶ所位あるということですから、平均すれば４キロ間隔で１個ずつあるということになります。ただ規模が色々ですから、希望者が全員希望の場所に泊まれるわけではないようです。土田さんは、早いもの勝ちを強調しています。私たちはアルベルゲの中にははいりませんでしたので、黛さんと鎌田さんの著書よりその様子を紹介しておきます（図31･32）。

アルベルゲ（巡礼宿）にて就寝

図31アルベルゲのベッド（黛著書より）

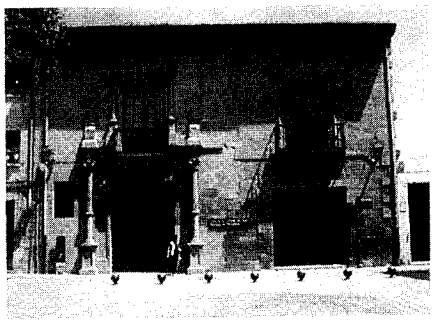


図32大規模なアルベルゲ（鎌田著書より）

私たちはログローニョの町のアルベルゲに連れて行ってもらいました。壁に帆立貝の看板が取り付けてあって（図33）、それだけでもわかるんですが、きちんと「Albergue」と明示してありました。次はレオンのアルベルゲ。ここには実は他の目的ー巡礼手帳の入手ーのために行ったんでが、言葉が全然通じなくて交渉は空振りでした。ここの表には「i」というマークがありました（図34）。これはinformationの意味のようで、情報センターにもなっているということです。さらにポルトマリンのアルベルゲ。そこには瓢箪をぶら下げた杖を持った巡礼者の看板（図35）がありましたが、これはなかなかユーモアーのある図柄でした。このポルトマリンの町の前が低くなっておりまして、そこに上がっていく石段の所にも巡礼道を示す看板がありました。ここのアルベルゲは、「ALBERGUE PRIVADO」すなわち民間経営の宿ですよということを看板（図36）に表示してありました。同時に「PENSION CAFE BAR」とあって、PENSION＝食事付きの宿あるいは民宿、と断ってあります。

図33

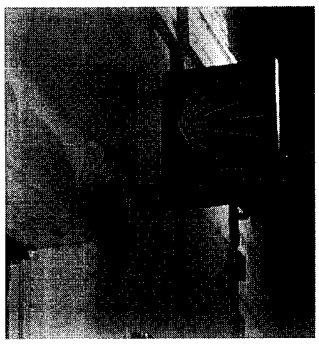


図34

図35

図36

4　接待はあるか？

接待の問題。一昨年の研究集会で、サンティアゴ巡礼に接待はあるのかという質問が出てきた時に、鎌田さんが明確に接待は無いと発言されました。但し体験記では接待らしきものをちょこっとだけ見受ける感じがします。土田さんの文章の中に、コーヒーとビスケットを奢ってくれた茶屋の主人がいた話とか、黛まどかさんの本には杖の接待をする（杖を作ってあげる）おじいちゃんがいると、書かれてます。

私がサンティアゴで巡礼者の写真と撮ろうとしていたところ、写真（図37）の左端の女性がすっと巡礼者

に寄っていきましてビニールの袋を渡したんです。この女性はその中から赤い色のジャンパーーかなり大きなジャンパーを出して示してまた袋にいれて渡したのです。巡礼者はそれを受け取り手に持っています。で、その女性が離れていくのを待って巡礼者に断って写真撮らせてもらいました。ジャンパーを広げている時に撮ればよかったんですけども、ちょっと遠慮いたしました。

図37巡礼者と彼に袋を渡して去る女性

従って四国遍路みたいな形での接待はないのでしょうが、個人的にはあまり目立たないかたちでやっぱりあるかなと思いました。但し土田さんの記事にも黛さんの本にも沿道の住民との交流ということはほとんど触れられていません。たまにさっき述べたようなのはあるんでしょうが、他には地域住民との交流というのはほとんど書かれていません。これら記事や本に特徴的なのは、巡礼者同士が助け合ったり、情報交換したりする、その連帯感というのは盛んに出てまいります。しかし沿道住民との関わりというのがほとんど出てこない。ただこれ一ヶ所はかなり有名な話らしいんですが、イラチェというところにワインの泉というところがあることです。ワインを醸造している会社があって、そこの表には蛇口が二個あって、一つからは水、他のひとつからはワインが出るだそうです。これは良く知られた話みたいです。

5　聖遺物とイメージの世界

キリスト教世界では山川先生もおっしゃいましたように、聖遺物が奇跡をもたらすと信じられています。ですから皆これになるべくに近づこうとするわけです。サンティアゴ・コンポステーラの場合は、大聖堂の主祭壇にヤコブの像が飾ってあって、その裏に行ってヤコブのマントの上から抱きつくことができるようになっています。抱きつく、あるいは接吻もできます。私たちも触ってきました。私たちが行った時には像の後ろにお坊さんが一人座っていて、賽銭箱を目の前に置いているんです。私たちはヤコブ像に触れた後お金を入れていくんです。そしてそのあと、階段をおりて地下室に行って、ヤコブ像の真下に置いてある棺を拝むことができるようになっています。従って、聖遺物（ヤコブの遺体）そのものに触るということは当然不可能ですが、なるべく人々をそこへ近づけていく、あるいは近づくことができる形をとっています。そういう仕組みがつくってあります。もう一つは先ほど菅谷先生が栄光の門で詳しく紹介してくれましたが、聖書に出てくる話とかキリスト教の奇跡、ヤコブにまつわる奇跡の話、などがイメージ化されて門などに彫り込んであるわけですね。大聖堂なり教会に行きますと、奇跡話や聖書の中の話などがイメージ化されて、掲げられている。これでもかこれでもかと、そういうイメージが作られ、飾られています。

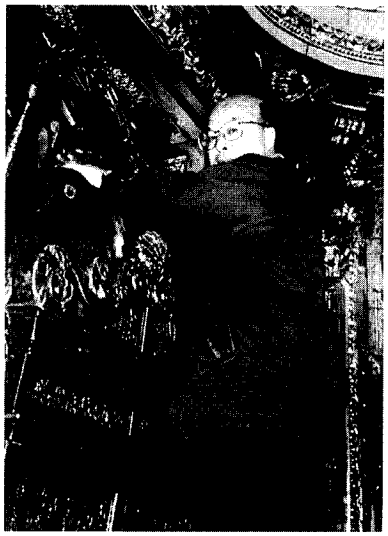


図38ヤコブ像に抱きつく

私たちの四国遍路の場合は、本堂で拝み、大師堂でも拝みますが、中が全然見れないケースが多い。あるいは堂の扉は開けてくれてても、秘仏と言って逗子は閉じたままで本尊の仏さんは見れない場合が多い。そういうのを私たちは納得して廻ってるわけです。キリスト教世界とは大分違うなという感じは持ちます。

こういう風に聖遺物になるべく近づけるとか、参拝にきた人々に様々なイメージで語りかけて行くような仕組み—ある意味では即物的な、具体的なスタイルがキリスト教世界にはあるようです。私たちの場合は、本尊や大師との接触は非常に抽象的、あるいはひょっとしたら観念的なのではないかと思います。

6 フィニステーレ

図39フィニステーレ　図中央の岬の左端

サンティアゴ・デ・コンポステーラで巡礼を終えた人々はフィニステーレに向かいます。ここには、「0m」の標識があります。巡礼者がここにやってきて、巡礼中の持ち物を焼いたり、捨てるところです。岬の一番先、しかも波打ち際のちょっと上くらいまで降りていってみました（図40）。私は高所恐怖症で高いところは駄目なんですが、こういう所は好きで、切り立っていても大丈夫でした。その辺りの岩にも、ものを燃やした跡がございました。岩の穴を利用して持っていったものをここで焼いているわけです（図41）。上の方にも焼いた跡はたくさんあります。私が降りて行ったよりももっと下に行った人がいるらしくて、岩の割れ目に旗が立ててありました。

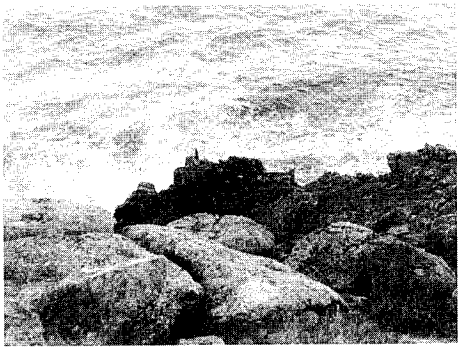


図40

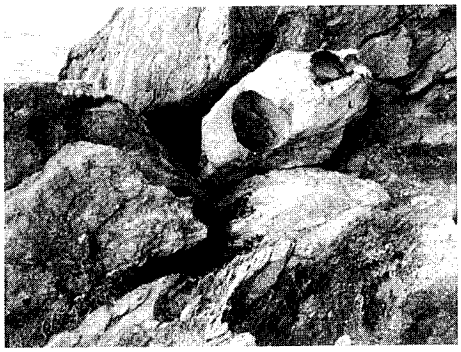


図41

7　無料頒布のガイドブック『PILGRIM'S　GUIDE』

最後はガイドブックの問題です。先ほどから紹介している英文のガイドブックはポケット版で、非常に装丁ががっちりと作られていて、折り込み地図を入れると120ページくらいある本です。ものすごく中身がいいんです。こういうものがガソリンスタンドに置いてあったのです。すごいなと思いました。カスティーリア・イ・レオン自治州の委員会が発行したもののようです。大きさは、『四国徧礼道指南増補大成』という江戸時代に繰り返し出版されたガイドブックとほぼ同じ―四国遍路の方が少し大きいくらい―、いずれにしろどちらもジャケットのポケットやらバッグのポケット中に入れて持ち歩くタイプとしては適切な大きさと思います。

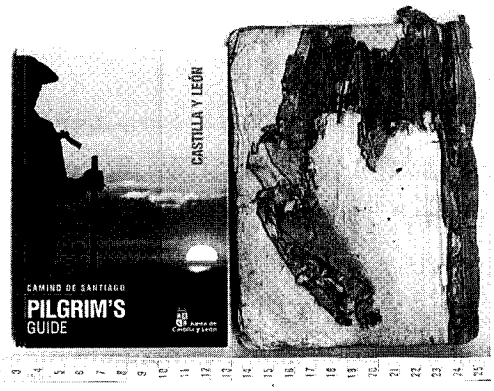


図42『PILGRIM'S　GUIDE』と
『四国徧礼道指南増補大成』

図43発行者の表示

この中にはルート上の地名一覧表が付いておりまして、この州はブルゴス県から始りますので、そこからが実質のスタートです。巡礼道そのものはもっと手前（Roncesvalles)から始まっています。この一覧には州内の距離、サンティアゴへの残り距離、その地の標高、人口などが記されている。パンプローナは人口18万、ログローニョは12万2千、私たちが泊まったサントドミンゴ・デ・カルサーダは5,490人という小さな町だった。但しこの辺りには85人の村というのがありますので、まだ大きい方かもしれません。

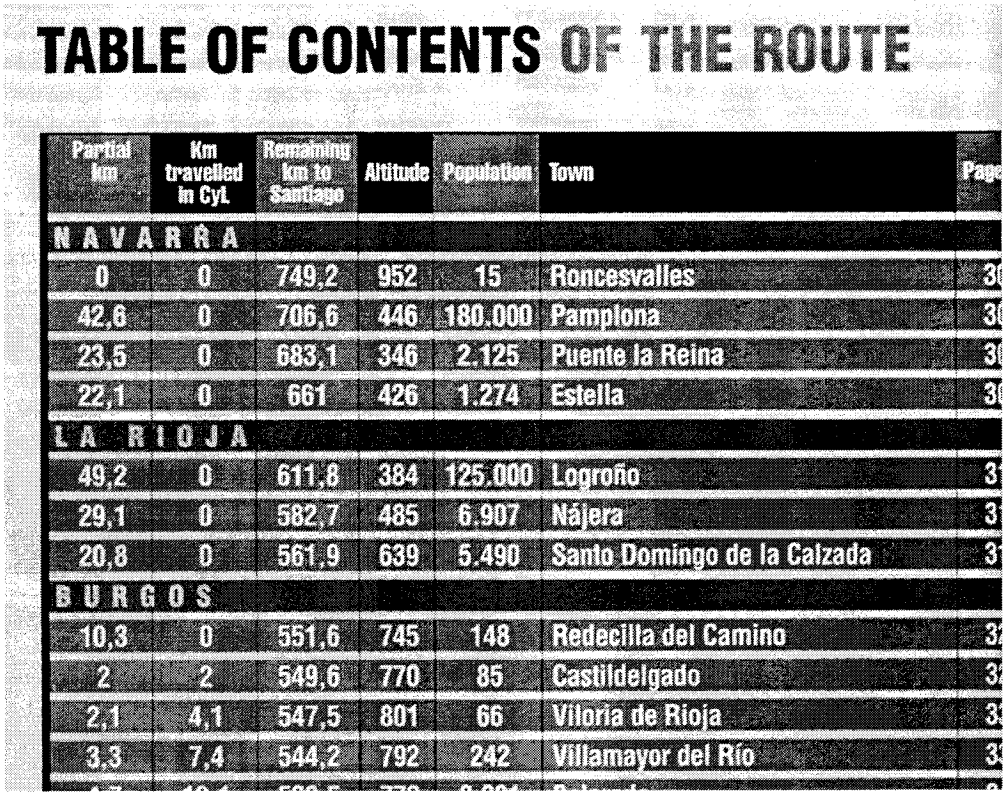
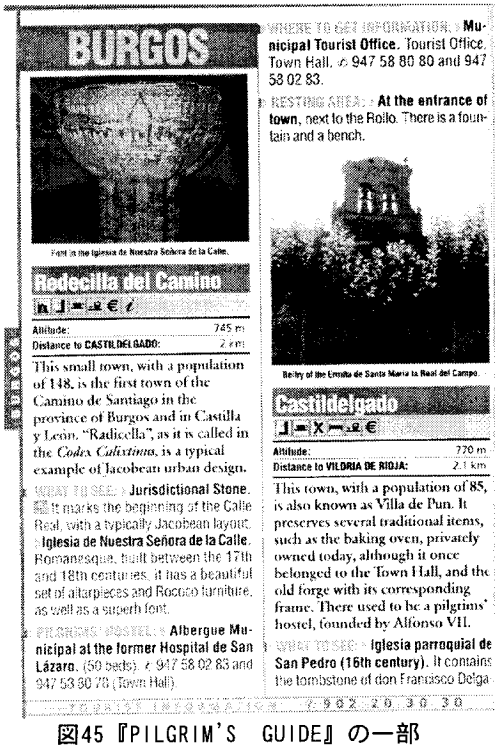


TABLE OF CONTENTS OF THE ROUTE

Partial km	Km travelled in Cyl.	Remaining km to Santiago	Altitude	Population	Town	Page
NAVARRA						
0	0	749,2	952	15	Roncesvalles	30
42,6	0	706,6	446	180.000	Pamplona	30
23,5	0	683,1	346	2.125	Puente la Reina	30
22,1	0	661	426	1.274	Estella	30
LA RIOJA						
49,2	0	611,8	384	125.000	Logroño	31
29,1	0	582,7	485	6.907	Nájera	31
20,8	0	561,9	639	5.490	Santo Domingo de la Calzada	31
BURGOS						
10,3	0	551,6	745	148	Redecilla del Camino	32
2	2	549,6	770	85	Castildelgado	32
2,1	4,1	547,5	801	66	Viloria de Rioja	32
3,3	7,4	544,2	792	242	Villamayor del Río	32

図44　巡礼道関係地一覧（『PILGRIM'S　GUIDE』）

この一覧表には、巡礼道上の関係地と距離などの情報と掲載のページが書いてあります。　ブルゴス県の一番目の村、Redecilla　del　Caminoは、次のような記事があります。



BURGOS

Font in the Iglesia de Nuestra Señora de la Calle.

Redecilla del Camino

Altitude: 745 m
Distance to CASTILDELGADO: 2 km

This small town, with a population of 148, is the first town of the Camino de Santiago in the province of Burgos and in Castilla y León. "Radicella", as it is called in the *Codex Calixtino*, is a typical example of Jacobean urban design.

WHAT TO SEE: **Jurisdictional Stone.** It marks the beginning of the Calle Real, with a typically Jacobean layout. **Iglesia de Nuestra Señora de la Calle.** Romanesque, built between the 17th and 18th centuries, it has a beautiful set of altarpieces and Rococo furniture, as well as a superb font.

PILGRIMS' HOSTEL: **Albergue Municipal at the former Hospital de San Lázaro.** (50 beds). ✆ 947 58 02 83 and 947 53 50 78 (Town Hall).

WHERE TO GET INFORMATION: **Municipal Tourist Office.** Tourist Office, Town Hall. ✆ 947 58 80 80 and 947 58 02 83.

RESTING AREA: **At the entrance of town,** next to the Roilo. There is a fountain and a bench.

Belfry of the Ermita de Santa María la Real del Campo.

Castildelgado

Altitude: 770 m
Distance to VILORIA DE RIOJA: 2.1 km

This town, with a population of 85, is also known as Villa de Pun. It preserves several traditional items, such as the baking oven, privately owned today, although it once belonged to the Town Hall, and the old forge with its corresponding frame. There used to be a pilgrims' hostel, founded by Alfonso VII.

WHAT TO SEE: **Iglesia parroquial de San Pedro (16th century).** It contains the tombstone of don Francisco Delga

図45『PILGRIM'S　GUIDE』の一部

○標高７４５ｍ ○次のCastildelgado　まで距離。２ｋｍ。○人口１４８人等この地域の説明 ○見るべきもの（WHAT TO SEE）○巡礼者の宿（PILGRIM'S HOSTEL）○情報はどこでゲットできるか（WHERE TO　GET　IMFORMATION）○休憩できる場所（RESTING　AREA）

とあります(記述内容は省略）。

巡礼道上の関係各地の記事には以下の情報が提供されることになっています。

・巡礼宿　・噴水（水）　・バール　・レストラン
・ホテルーペンション　・食料雑貨店　・銀行　・薬局
・赤十字センター　・自転車修理店　・キャンプ場
・インフォメイションポイント

大きな都市になると、上のものはほとんどそろっているでしょうが、先の Redecilladel　Caminoでは、宿の情報、インフォメイションポイント、休憩場所（噴水とベンチ）だけでした。

この英文のガイドブックを読みながら、江戸時代の『四国辺路道指南』を思い浮かべていました。真念が作った道しるべは、まさにこの形なんですよ。ですから『四国辺路道指南』は非常に早い時期に遍路をする人たちのことを考えて作ったいい本だったんだなと思いました。

おわりに

最後に、鎌田一志氏・黛まどか氏、この両氏の著書、それから土田さんの日経の連載記事に大変お世話になりました。これらなしには今回の報告ができなかっただろうと思ってます。改めて感謝いたいします。

次に、行政の方にお願いですが、ぜひ本格的な調査団をつくって調査に行くということを考えてほしいと思います。特に四国遍路の場合は四県が共同で推進しておりますので、そこが正確な情報を握っておく必要があると思います。やはりサンティアゴなんか行きますと、大分遍路道とその周辺を見る目が変わってくるような感じがいたしました。ぜひ行政の方も本格的に調査をやっていただきたい、こういう要望をして私の報告を終わります。

最後に感謝の意を込めて両著書の表紙図版を掲げます。

図46鎌田一志著『スペイン悠久の大地ーサンティアゴ巡礼の道を歩く』（2006年）

図47 黛まどか著『星の旅人　スペイン「奥の細道」』（光文社、2000年）

付記　本文中の文献の他に、以下の文献をも参照しました。

関哲行『スペイン巡礼史　「地の果ての聖地」を辿る　』（講談社現代新書、2006年）

杉谷綾子『神の御業の物語』（現代書館、2002年）

関哲行編『世界歴史の旅　スペイン』（山川出版社、2002年）